

大伴小だより

富田林市立大伴小学校 令和4年2月25日（金）3月号



まもなく卒業する6年生へ

校長 堤 周作

「感染拡大予防」と「学びの継続」との葛藤の中、大変ご心配をおかけし、また、学級・学年閉鎖でご負担をおかけし、深くお詫び申し上げます。そんな喧噪をよそに、運動場では桜が芽吹き始め、卒業式や入学式をお祝いしようと待ち望んでいるようです。今号が最後になる6年生に向けて、2つの話を贈ります。

卒業式で6年生が合唱(感染対策の上) 予定の歌「旅立ちの日に」誕生の話。昭和63年、ある中学校は非行に走る生徒が多く、荒んでいました。新たに赴任した校長先生は「歌の力で生徒達の心を変えていきたい」と考え、音楽の先生も共鳴し、そこから言葉に表せない程の努力が始まりました。「真面目に歌うのは恥ずかしい」という生徒の気持ちを、「歌うことって気持ちいい」というポジティブな意識に変化させることは簡単ではありません。先生達は泣きながら生徒に向かい合い、物凄いパワーを与え続けました。すると、歌うことをためらっていた生徒も、その情熱に心を動かされ次第に輪の中に入り、半年程で学校中に歌声が響き渡り、荒んでいた生徒達にも笑顔が戻ってきたそうです。それから3年後、音楽の先生は「素晴らしい学校になったのは、何より生徒達が頑張ったから。そんな生徒達の卒業の記念に歌を贈りたい」と考え、校長先生に作詞を依頼しました。その時校長先生は、「私にはそんなセンスはない」と固辞しましたが、翌朝、音楽の先生の机に書き上げられた詞が置いてありました。先生はその詞を抱きかかえて音楽室へ行き、たった15分でメロディーが浮かんできたそうです。それは卒業式目前の2月下旬、まさに奇跡でした。

熱い気持ちがこもった曲、6年生の皆さんが旅立つ日にふさわしい曲だと思います。心を込めて歌ってください。親御さんと私たち教職員は、君たちとの様々な思い出を胸に抱きながら、聞きますね。

白い光の中に 山なみは萌(も)えて	遥かな空の果てまでも 君は飛び立つ	詞 小嶋 登
限りなく青い空に 心ふるわせ	自由を駆ける鳥よ ふり返ることもせず	曲 坂本 浩美
勇気を翼にこめて 希望の風にのり	このひろい大空に 夢をたくして	
懐かしい友の声 ふとよみがえる	意味もないいきかいに 泣いたあのとき	
心かよったうれしさに 抱き合った日よ	みんなすぎたけれど 思いで強く抱いて	
勇気を翼に込めて 希望の風にのり	このひろい大空に 夢をたくして	
いま 別れのとき 飛び立とう 未来信じて	弾む若い 力信じて このひろい このひろい 大空に	

「21世紀に生きる君たちへ」 司馬遼太郎(歴史小説家、故人)

私は、歴史小説を書いてきた。もともと歴史が好きなのである。両親を愛するようになって、歴史を愛している。歴史とはなんだろう、と聞かれるとき、「それは、大きな世界です。かつて存在した何億という人生がそこに詰めこまれている世界なのです」と、答えることにしている。私には、幸い、この世にたくさんのすばらしい友人がいる。歴史の中にもいる。そこには、この世では求めがたいほどに素晴らしい人たちがいて、私の日常を、励ましたり、なぐさめたりしてくれているのである。だから、私は少なくとも2千年以上の時間の中を、生きているようなものだと思っている。この楽しさは、もし君たちさえそう望むなら、おすそ分けしてあげたいほどである。ただ、さびしく思うことがある。私がおもっていないで、君たちだけが持っている大きなものがある。未来というものである。私の人生は、すでに持ち時間が少ない。例えば、21世紀というものを見るのができないに違いない。君たちは、違う。21世紀をたっぶり見ることができるばかりか、その輝かしい担い手でもある。もし、「未来」という街角で、私が君たちを呼び止めることができたなら、どんなにいいだろう。「田中くん、ちょっとかがいますが、あなたが今歩いている、21世紀とは、どんな世の中でしょう」そのように質問して、君たちに教えてもらいたいのだが、ただ残念にも、その「未来」という街角には、私はもういない。だから、君たちと話ができるのは、今のうちだということである。

私は、人という文字を見るとき、しばしば感動する。ななめの画がたがいに支え合って、構成されているのである。そのことで分かるように、人間は、社会をつくって生きている。社会とは、支え合う仕組みということである。原始時代の社会は小さかった。家族を中心とした社会だった。それがしだいに大きな社会になり、今は、国家と世界という社会をつくり、たがいに助け合いながら生きているのである。自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。このため、助け合う、というところが、人間にとって、大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動のものは、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることを言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。「やさしさ」「思いやり」「いたわり」「他人の痛みを感じること」みな似たような言葉である。これらの言葉は、もともと一つの根から出ている。根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身に付けねばならない。その訓練とは、簡単なことだ。例えば、友達がころぶ。ああ痛かったろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分でつくりあげていさえすればよい。この根っこの感情が、自己の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、21世紀は人類が仲良しで暮らせる時代になるに違いない。

鎌倉時代の武士たちは、「頼もしき」ということを、大切にしてきた。人間は、いつの時代でも頼もしい人格をもたねばならない。男女とも、頼もしくない人格に魅力を感じないのである。もういちど繰り返そう。さきに私は自己を確立せよ、と言った。自分には厳しく、相手には優しく、とも言った。それらを訓練せよ、とも言った。それらを訓練することで、自己が確立されていく。そして、「頼もしい君たち」になっていく。以上のことは、いつの時代になっても、人間が生きていくうえで、欠かすことができない心が構えというものである。君たち。君たちは常に晴れ上がった空のように、たかだかとした心を持たねばならない。同時に、ずっとりとたくましい足どりで、大地をふみしめつつ歩かねばならない。私は、君たちの心の中の最も美しいものを見続けながら、以上のことを書いた。

書き終わって、君たちの未来が、真夏の太陽のようにかがやいているように感じた。

(平成元年「小学校国語六年」大阪書籍より)